

親鸞における共生の思想
—信に基づく共同体(2013年1月16日&23日)—

1 共生の概念

symbiosis の訳—生物学的概念(植物学者の三好学)

- ・現代社会のあり方を考えるキーワード
- ・環境、教育、福祉、家族論、社会学、文化人類学など、さまざまな分野で用いられる

共生の概念が多用されるようになった理由

- ・現代社会が、競争原理や効率優先を重視した事実上の「非共生」的な社会であること
- ・科学技術の発展、合理性の追求、人間中心主義などを特徴とする現代文明の行き詰まり

2 仏教における共生

① ブッダの教え

仏教における共生の原点は、ゴータマ・シッダールタ(前 463～前 383)のさとり体験である。彼はヒマヤラ山麓のシャークャ族の王子としてこの世に生まれた。人生の根本問題(生・老・病・死)に直面して 29 歳で出家する。厳しい修行ののちにダルマ(dharma、法)に目覚め、ブッダ(目覚めた者)となる。当時の自由思想家の一人として、その後の生涯をおもにガンジス川中流域を遍歴し、アーリア社会の中で新しい教えを説いた。

生まれによって賤しい人となるのではない。生まれによってバラモンとなるのではない。行為によって賤しい人ともなり、行為によってバラモンともなる。
(『スッタニパータ』142)

あらゆる生きものが幸福に、安全に、楽しくなるようにしよう。およそ命のあるものならば、弱いものも、強いものも、長いものも、大きいものも、中くらいのものも、短いものも、こまかいものも、大まかなものもみなすべて、目に見えるものも、見えないものも、遠くに住むものも、近くに住むものも、すでに生まれたものも、これから生まれようとするものも、あらゆる生きものが楽しくなるようにしよう。

(同書、145～147)

② 法然の教え

仏教の中で、とりわけ人間の内奥に潜む「罪惡」や「煩惱」を凝視したのが浄土教である。浄土教は、法然以前には日本仏教の一傍流にすぎなかったが、法然(1133～1212)とその弟子たちによって一つの宗派として独立した。法然は、阿弥陀仏の「本願」を救いの根拠とし、誰でも念仏を称えれば救われると強調した。

もし仏像を作ったり、寺院を建てたりすることが仏の願いにかなっているとすれば、貧困に悩む人々は、往生を諦めざるをえない…もしも、智慧や才能があることが仏の願いにかなっているとすれば、愚かで才能のない者は浄土への往生の希望を捨てなくてはならない…もし、豊かな教養をもつことが仏の願いにかなっているとすれば…もし戒律を保つことが仏の願いにかなっているとすれば…このことから分かるように、そのほかの修行も同様に現実性をまったく欠いている。

…百人が百人とも救われる専修念仏を無視して、千人中、一人も救われない雑多な修行をすべきではない。ひたすら念仏に励んで、他の修行は捨てるべきである。

三選の文

そもそも、速やかに迷いの世界を離れようと思うなら、二種の優れた法門のうちで、聖道門をさしおき、浄土門に入れ。浄土門に入ろうとするなら、正行と雑行の中で、雑行を捨てて正行に帰せ。正行を修めようと思うなら…正定業とは、すなわち仏の名号を称えることである。称名するものは必ず往生を得る。阿弥陀仏の本願によるからである。

…一度、本書に目を通したなら、壁の底に埋めて、人目につく窓際などに置いたままにしないでほしい。念仏に批判的な人に罪を作らせることになる。
(『選択本願念仏集』)¹

従来の聖道門(しょうどうもん、旧仏教のこと)が聖者中心の人間理解や救済観であったのに対し、浄土門は凡夫中心の教えである。

聖者(しょうじゃ)＝煩惱を断ちきって、さとりを開く人

¹ 町田宗鳳『NHK こころの時代 法然を語る』下、日本放送出版協会、2009年、19、22、29、30頁。

凡夫(ぼんぶ)＝煩惱にとらわれて、迷いから抜け出られないすべての人のこと

なお、凡夫については、親鸞が『一念多念文意』の中で次のように解説している。

凡夫というのは、真理に暗い愚かさや煩惱がその身に満ちみちている私たちのことであり、欲も多く、怒り、腹立ち、そねみ、ねたむ心が多く、絶え間なくおこって、臨終の瞬に至るまで止まることなく、消えも絶えもしない。…このようなあさましい私たちであっても…無碍光仏の光の心に摂め取ってくださるから、必ず安楽浄土に至って…。

親鸞は、煩惱にまみれてこの世を生きていかざるをえない者を、共感をこめて「あさましきわれら」と呼び、このような凡夫を阿弥陀仏は一人も漏れなく光の心で救ってくださるから、浄土に至ることが必ずできる、と確信をもって述べている。

3 親鸞(1173～1262)の教え

① 親鸞の生涯(誕生～青年期)

- ・京都に日野有範の長男として生まれる²。
- ・9歳の春に出家し、約20年間を比叡山で過ごす。
(※親鸞が出家したころに養和の大飢饉(1181～82)が起こる。その惨状については『方丈記』参照)
- ・比叡山時代の親鸞については、堂僧として、つまり常行三昧堂などで念仏修行に励む天台宗の僧侶として過ごしていたことがわずかに知られている。
- ・比叡山を下り、京都の六角堂(頂法寺)に100日間こもる。
- ・95日目に聖徳太子(＝救世菩薩の化身)が夢の中に現れ、往生を約束したという。
これを機に親鸞は法然のもとに100日間通い弟子となった。建仁元年(1201)、29歳のときの出来事である。

「しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」³
「私、愚禿釈親鸞は、建仁元年に自力の雑行を捨てて阿弥陀仏の本願に帰依した」という意味である。法然に対する信頼と敬愛の念が生涯を通して変わらなかったことは、『歎異抄』に書かれている次の親鸞の言葉からも理解される⁴。

この親鸞においては、「ただ念仏して、阿弥陀仏に救われ往生させていただくのである」という法然上人のお言葉をいただき、それを信じているだけで、他に何かがあるわけではありません。(中略)たとえ法然上人にだまされて、念仏したために地獄へ堕ちたとしても、決して後悔はしません。

(『歎異抄』第二条、梯實圓訳)

- ・その当時、法然は「本願を信じ念仏を称えれば、誰でも浄土に往生できる」という専修念仏の教えを広め、吉水(京都東山)の草庵には大勢の人が集まった。
- ・法然に師事した5年間の吉水時代は、親鸞の生涯の中で最も充実した時期であったと考えられている。4年目に『選択本願念仏集』を書写することが許され、法然の肖像画を描くことも認められている。妻となる恵信尼との結婚もこのころであろうと推測されている。

② 往相と還相

親鸞の主著『教行信証』は、教・行・信・証・真仏土・化身土の六巻からなり、浄土真宗の根本聖典とされている。本書の全内容を要約する重要な文章が「教巻」の冒頭に記されている。

² 日野家は藤原氏の流れをくむ下級貴族で、儒学と歌道をもって朝廷に仕えた。一族の中で史料に残っているのは、親鸞の伯父にあたる日野宗業(むねなり)である。彼は高名な儒学者で、公卿の位(従三位)にまで昇進したことが記録されている。

³ 『浄土真宗聖典』第二版(以下『註釈版聖典』と略記)、本願寺出版社、1988年、344頁。

⁴ 法然への絶対的な信頼は、「法然上人のいらっしゃるころには、人が何といおうと、たとえ地獄へ堕ちるに違いないといおうとも、私はこれまで何度も生まれ変わりして迷い続けてきた身であるから、どこへでもついて行きます」(『恵信尼消息』第三通)という親鸞の言葉からも確認される。

つつしんで浄土の真実の教えを考えると、阿弥陀仏による二種の回向があります。一つには往相、浄土に生まれる姿であり、二つには還相、浄土に生まれた者がふたたびこの世に還ってくる姿です。往相の回向には、真実の教・行・信・証があります。

- ・往相と還相(げんそう)という二種の回向は、親鸞の宗教的世界の根幹をなす。
- ・回向とは、修行者が積んだ善行の功德を他者に「振り向ける」ことをいう。
- ・回向に往相と還相の二種があることを最初に説いたのは、曇鸞(中国浄土教の開祖)である。

往相＝この世から浄土に往生する姿

還相＝浄土に生まれ仏となった修行者が、再びこの世に還ってきて迷いの世界にある者を救おうとする姿

- ・親鸞以前の浄土教では、浄土に往くことが人生の最終目標と考えられていた。しかし親鸞は、浄土に往ってからこの世に還ってくる還相を重視し、現世を浄土の光の中に見つめている。
- ・曇鸞においては、往相も還相も、回向する主体はいずれも修行者とされた。
- ・しかし親鸞は、このような生き方は阿弥陀仏の本願力によって初めてなしえろとし、仏の救済力の絶対性を強調する。つまり、この世と浄土を往還するのは修行者であるが、その往相・還相を回向するのは阿弥陀仏の他力であるとする⁵。

③ 親鸞における信

大乘仏教の一般的な考えでは、人間の心には如来蔵(*如来の母胎・胎児の意)⁶、あるいは仏性(ぶっしょう、さとりを開きうる可能性)といわれる清らかなさとり的心が内在しているとされる。しかし、親鸞は人間の心のありようについて、本来清らかなものとは考えていない。晩年の作である『正像末和讃』の中で⁷、うそ・いつわりに満ちた自らの心をさらけ出している。

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし ^{こけ}虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし
(浄土真実の教えに帰依しても、真実の心などもち合わせていません。外面は真実らしく見せかけても、内心はうそやいつわりだらけの身です。清らかな心などさらにもち合わせていないわが身です)
悪性さらにやめがたし ^{だかつ}こころは蛇蠍のごとくなり 修善も雑毒なるゆえに 虚仮の行とぞなづけたる
(善いことをしようとしても、悪に沈んでしまう自分をどうすることもできません。私の心は蛇やさそりのように煩惱に毒されてしまっていますから、どんなに善を修めようとしても、その毒がまじってうそやいつわりの行いになってしまうのです)

- ・ふつうの如来蔵思想によれば、如来蔵こそ人間の本来の心であり、煩惱は本来清らかな人間の心に偶発的に付着したものと解される。
- ・親鸞はこの考えを逆転させ、煩惱の方が人間の心の本来的なありようであり、清らかなさとり的心は人間には内在しないと主張する。
- ・清らかな真実の心は、外部からしか与えられず、それは阿弥陀仏によって真実の信(真実信心)として贈与されるものである⁸。

⁵ ちなみに、『無量寿経』下巻に記される本願成就の文は、「あらゆる衆生、その名号を聞きて…至心に廻向して…」と訳されている。ところが、ふつつ「至心に廻向せり」と訳される句は、親鸞においては「至心二回向センメタマヘリ」と変更され、親鸞独自の解釈がなされている。これは、「せしめたまふ」という最上の尊敬を表す接尾語を付すことにより、回向を行う主体が阿弥陀仏であり、衆生は回向の客体にすぎないことを文法上明示したものである。『増補 親鸞聖人眞蹟集成』第一巻、法蔵館、2005年、163頁。

⁶ 『広説佛教語大辞典』によると、如来蔵とは、「如来の胎の意で、胎とは母胎と胎児のどちらをも意味する。成長して仏となるべき胎児とも、その胎に仏を宿すものともとれるが、いずれにせよ、単に心としてではなく、衆生をその存在の可能性全体からとらえた表現である」と説明されている。中村元『広説佛教語大辞典』下巻、法蔵館、1314頁。

⁷ 一般に「和讃」とは、漢文の經典や注釈書などに書かれた仏教の教えの意味を、日本語の「七五調」風に句を重ねて平易に表したものである。とくに親鸞の和讃は、誰でも容易に理解できるように四句で表現したことで知られている。

⁸ 末木文美士『仏典をよむ』新潮社、2009年、231～234頁

④ 親鸞の靈性

1 真の仏弟子

承元の法難後の親鸞は、「非僧非俗」の生き方を志し、とくに関東時代には伝道活動に専念した。妻を伴い、家族を連れての念仏中心の生き方である。親鸞は「信巻」の中で、阿弥陀仏から真実の信心と念仏をいただいた者を「真の仏弟子」と呼んでいる。

真の仏弟子というのは、真という言葉は偽に対するものであり、また仮に対するものです。弟子というのは釈尊や諸仏の弟子ということであり、それはまた他力の金剛心のはたらきによって称名する念仏者のことです。この信心と念仏によって必ずこの上ないさとりを開くことに定まっているので、真の仏弟子といえます。

- ・偽とは 95 種におよぶ邪道(=仏教以外の宗教思想)を意味し、具体的には世俗社会において有用な教えや見解を拠り所に生きている者のことを指す。
- ・親鸞の考えでは、儒教や道教などのさまざまな思想は、人間が生きていく上で必要な倫理道德ではあるが、そのような教えだけでは「凡夫を離れて、仏となることはできない」としている。
- ・仮は、聖道門の人たちや、浄土門に属していても「自力の念仏」を拠り所にしている人たちのことである。外見上は仏法に帰依しているように見えるが、実際には自らの思いやはからいを、つまり「自力」を救いの根拠としている者のことである。

2 悲歎述懐

悲歎述懐は「真の仏弟子」の解釈の最後に結文として記されているが、親鸞の内面が表出したきわめて稀な箇所といえる。

まことに知ることができました。なんという悲しいことでしょう。この愚かな親鸞(原文:愚禿鸞)は、大海のように果てしない愛欲に溺れ沈み、深山で道を失っているように名利に迷って、正定聚の仲間に入れていただいていることを喜ばず、日々真実のさとりに近づく身にしていただいていることを楽しむ思いもありません。恥ずかしく、心の痛むことです。

親鸞は經典や注解書を駆使して「真の仏弟子」の意味を深く掘り下げ、「本願を信じ念仏する者は、真の仏弟子として正定聚の仲間に加わり、弥勒菩薩と同じ位にある」と主張する⁹。しかしここに来て文体は一変する。

ここでは「愚禿鸞」とのみ書かれ¹⁰、釈尊の弟子を意味する「釈」の文字が省略されている。親鸞の心に「仏弟子」失格という忸怩たる思いがあったからに違いない。本願を信じ念仏の教えを聞けば聞くほど、自分の罪深さはまるで底なしの海のようにだと親鸞は告白する。しかしそれは言い換えれば、すでに阿弥陀仏の限りない光に照らされていることを意味するのではなからうか。人間は闇の中では何も見えない。真実の光に照らされて初めておのれの翳の暗さを知ることができるのである。

＊映像 DVD『親鸞の見た風景』(親鸞聖人 750 回忌記念企画、テレビ朝日映像株式会社、2012 年)

⑤ 親鸞の妻

1 六角堂での夢告

親鸞における共生の思想を考察する際に、恵信尼(1182~1268)の存在を無視することはできない。なぜなら、親鸞の信仰生活は妻や家族をもつことで豊かになり、また鍛練された面も大きいからである。大正十年(1921)西本願寺宝庫から恵信尼自筆の書状十点(以下『恵信尼消息』と記す)が発見されて以来、恵信尼に関する研究が進められた。

『恵信尼消息』第一通によると、

- ・親鸞は堂僧としての修行生活に終止符を打ち、比叡山を下りる
- ・洛中の六角堂に 100 日間こもる
- ・95 日目の暁に聖徳太子(=救世観音の化身)の「示現の文」(じげんのもん)にあずかる

⁹『註釈版聖典』256~265 頁。

¹⁰『増補 親鸞聖人眞蹟集成』第一巻、258 頁。

- ・ただちに法然のもとに赴き、100 日間通ったすえに弟子となる

*この手紙に同封されていたはずの「示現の文」は、実際には散逸し現存していない。しかし『御伝鈔』や『親鸞夢記云』に書かれ、また平松令三や梯實圓などの研究者が主張するいわゆる「行者宿報偈」が、示現の内容として支持されている。

行者宿報偈とは

「行者宿報ニテ設(タト)ヒ女犯(ニヨボン)ストモ 我、玉女ノ身ト成リテ犯セラレム
一生ノ間、能(ヨ)ク莊嚴(シヨウゴン)シテ 臨終ニ引導シテ極樂ニ生セシメム」

(訳) 仏道を修行する者が、宿業の報いによって女性と添いとげようと望むならば、私(聖徳太子＝救世観音の化身)が玉女となって現れ、あなたを豊かに飾り一生添いとげましょう。そして臨終にあたっては極樂に導きましょう。

- ・六角堂は聖徳太子の創建と伝えられ、観音菩薩の靈驗所として有名であった。
- ・当時の人々にとって夜は聖なときであった。
- ・とりわけ暁(*現代における真夜中の2～3時ごろ)は、神仏が出現し人間と交感し、示現や夢告があると信じられた最も重要な時間帯であった¹¹。
- ・「行者宿報偈」の言葉に注目してみると、「女犯」「玉女」「被犯」など性的欲求に彩られた青年親鸞の心理を投影しており、出家者に要求される不淫戒と性的欲望との間の激しい葛藤を表現したものと考えられる。

2 『覚禅鈔』との比較

この「行者宿報偈」には、先行する史料の存在、すなわち親鸞とほぼ同時代の覚禅(1143～?)が著した『覚禅鈔』の存在が知られており、両者にはいくつかの類似点が指摘されている。

『覚禅鈔』四十九・如意輪下

「又云ク、(若シ) 邪見心ヲ発シテ、淫欲熾盛ニシテ、世ニ墮落スベキニ、如意輪、我レ王ノ玉女トナリテ、ソノ人ノ親シキ妻妾トナリテ、共ニ愛ヲ生ジ、一期生ノ間、莊嚴スルニ福貴ヲ以テス、無辺ノ善事ヲ造ラシメ、西方極樂浄土ニ仏道ヲ成ゼシメン、疑ヲ生ズルコトナカレ、ト云々」
(『大正新修大蔵經』図像部第四卷、原漢文)

(訳) もしもよこしまな心がおこって、色欲が盛んになり、仏道を踏みはずすようなことになったら、如意輪観音である私が玉女となり、その人の妻妾として愛しあい、一生を気高く幸福にして、善事をたくさん行って、死後には西方極樂浄土に生まれさせ、きっと仏道を完成させるでしょう。このことを疑ってはなりません。

- ・「行者宿報偈」とこの史料を比較すると、「玉女」「莊嚴」「極樂」が一致し、「一生」と「一期生」も非常に近い関係にある。
- ・この密接な関係については、『覚禅鈔』が年代的に先行していることから、おそらく親鸞が比叡山時代に『覚禅鈔』を熟読し、特にこの箇所が意識の底に残り、それが夢となって現れたのではないかと推測されている。
- ・但し、『覚禅鈔』では、女犯の原因が「邪見心」や「淫欲熾盛」、つまり本人の意志の弱さにあるとされている一方、「行者宿報偈」では女犯は「宿報」に由来するとされる。
- ・平雅行は、ここに両者の思想の決定的な違いがあるとする。親鸞が女犯を「宿報」、つまり前世からの報いとする場合、それは本人の意志に関係なく誰にでもありうることで、あらゆる罪業(煩惱)の象徴表現であるという。
- ・従って、女犯の許可は普遍的な人間の罪業自体のゆるしを意味し、人類の罪と救済のドラマとして解釈されるとしている¹²。

¹¹ 今井雅晴『親鸞の家族と門弟』法蔵館、2002 年、39～40 頁。

¹² 平雅行『親鸞とその時代』法蔵館、2001 年、106～109 頁。

六角堂の夢告を受けたときには、親鸞はまだ恵信尼に出会っていないはずである。もし行者宿報偈に出てくる「救世観音」を恵信尼と解釈するなら、親鸞は近い将来に起こることになる恵信尼との出会いを、自分の意志を超えた運命的なものと受けとめていたように思われる。

親鸞は「女犯」を既成の事実として黙認していた当時の他の僧侶たちとは異なって¹³、妻帯の是非や女性の救いに深い関心を寄せ、真剣に悩み、何度も思いをめぐらせていたと考えられる。いずれにせよ、親鸞に開示された六角堂の夢告が、妻帯のきっかけとなり、女性との共生の道を具体化させる第一歩となったことは疑いえない事実だと思われる。

3 恵信尼の家系について

近年の研究によると、恵信尼の父と伝えられる三善為教は九条兼実の家司(*上流貴族の家政を担当する家老の役)で、『玉葉』治承2年正月27日条に見られる「越後介三善為則」と同一人物である可能性が高いとされている。彼は京都の中級貴族であり、彼の家は3代にわたって越後介を務めていたようである。こうした事情がのちに恵信尼の越後での所領に繋がったと考えられている。

中級貴族を父にもつ恵信尼は、京都で親鸞に出会い、結婚したであろうと推測されている。僧親鸞と結婚するにあたっては、俗人相手とは違い相当の覚悟を要したであろう。承元の法難(1207)の結果、親鸞の流罪先は越後と決まる。親鸞35歳、恵信尼26歳のときの出来事である。その際、恵信尼には親鸞と別れるという選択肢もあったはずだが、恵信尼は親鸞に同行する。

流罪地越後での滞在中に、恵信尼と親鸞に小黑女房と信蓮房の2児が誕生したとされる。流罪が解かれ(1211)しばらく越後に留まった後、親鸞一家は関東に向かう(建保2年、1214)。

4 晩年の恵信尼

親鸞と恵信尼は、阿弥陀信仰に基づいて、夫婦としての絆を強めた。しかし晩年になると、親鸞は京都、恵信尼は越後に別居し、そのまま最後を迎えることになる。別居の理由としては、恵信尼がいくらか三善家の所領を相続したため、その管理のために何人かの子どもを連れて越後に赴いたとする説が有力である。

❖鎌倉時代は、現代のように一夫一婦制が常識ではなかった。当時の夫婦別財の原則は、その財産によって夫を支えることが可能であったことを示している¹⁴。当時は女性が経済的にも自立していた時代であり、妻の財産は妻の財産であり、決して夫の財産と一緒にではなかった。親が子どもに財産を譲る場合も、母親の財産はあくまで母親が子どもに譲った¹⁵。

『恵信尼消息』に示されている恵信尼晩年の信仰観は、親鸞よりも法然に近いと考えられる¹⁶。

- ・「生きている間に、卒塔婆¹⁷をたててみたい」(第5通、恵信尼83歳)
- ・「私は間もなく極楽に往生するでしょうし、そこでは何でも明らかに見ることができますので、必ず念仏して、ともに極楽へ往生してお会いしましょう。いよいよ極楽に往生してお会いするのですから、何でも明らかになることでしょう」(第8通、恵信尼87歳)

⑥ 現生正定聚

親鸞は自らの思想の中核にすえた回向論(=往相・還相)を発展させ、信(信心)を媒介とする独自の死生観を構築する。その場合、従来の浄土教が未来救済型で、臨終念仏や臨終行儀を重んじたのに対し¹⁸、親鸞は「信」に基づく現世重視の救済観を展開した。

¹³ 親鸞が生まれた後白河上皇の時代には、妻帯を隠すのが上人であるといわれていた。ところが、親鸞の晩年にあたる『古今著聞集』編集のころには、妻帯しない上人のみならず、それを隠す上人さえ少なくなった。9世紀のころから次第に行われはじめた僧侶の妻帯は、13世紀中葉になると一般的な現象になった。

¹⁴ 山崎龍明『NHK こころを読む 妻恵信尼からみた親鸞』日本放送出版協会、2004年、4頁。

¹⁵ 今井雅晴『親鸞と恵信尼』自照社出版、2004年、66、80～81頁。

¹⁶ 山崎龍明、前掲書、118～119頁。

¹⁷ 梵語ストゥーパの音写で、釈尊の遺骨を納めた宗教建造物で、ここでは墓標のことである。卒塔婆は親鸞のためとする説と、恵信尼が自らの寿塔として建てたとする説がある。

「証卷」の冒頭

煩悩にまみれた凡夫(煩悩成就の凡夫)や迷いの世界の者たち(生死罪濁の群萌)が、阿弥陀仏の往相回向である信心と念仏を与えられると、即座に大乘のさとりを開くことが定まった仲間、正定聚に入ることができるのです。正定聚に入れば、必ずさとり、滅度に至るのです。

(原漢文)¹⁹

親鸞は証(さとり)の具体的な内容について、「煩悩にまみれた凡夫や迷いの世界の者たちが阿弥陀仏から回向された信心と念仏を与えられると、①即座に現世において正定聚に入り(＝現生正定聚)、②来世には必ず涅槃に達する」と明言する。

＊正定聚＝往生することが正しく定まり、仏になることが約束されているさとの仲間

親鸞以前の浄土教では、死んでから浄土に往くものと考えられ、また正定衆も死後のことと理解されていました。ところが、親鸞は信心と念仏を授かった「今、ここに」往生の道が始まり、その時点で正定聚に入ることができるとしている。

つまり、親鸞にとって信心とは、死後に浄土に生まれるための条件でも手段でもなく、この世をより良く生き、現実世界を切り拓いていくダイナミックな力なのである。この世でともに信じ合い念仏を称え合う仲間としての「現生正定聚」の考えは、信に基づく共同体の形成を基礎づける重要な理念と考えられる。

親鸞の伝道活動は関東時代に本格化するが、そこで「信」に結ばれた共同体が創設され、後の真宗教団の原型が構築される。門弟に宛てた手紙の中で、親鸞は彼らのことを「同朋」(どうぼう)「同行」と呼び、平等と互敬の精神を貫いているが、日本中世社会の身分秩序のもとでは独創的な考えである。

関東時代に親鸞の教えに接し念仏者となった人々の数は、『親鸞聖人門侶交名帳』などの史料で知られる 70 余名をはじめ、数千人に達したであろうと推測されている。親鸞の伝道活動の結果、専修念仏に帰した人々の輪は、常陸、下総、下野の三国を中心に関東の東北部一円にしだいに広がった。この状況について、今井雅晴は次のように述べている²⁰。

親鸞が説く念仏が一挙に関東に広まったかという点、そうではあるまい。関東の人々はすでに信仰をもっている。(中略) それを乗り越えるためには、親鸞は自分の人間性を関東の人々に信用してもらわなければならぬ。親鸞自身の宗教生活や家庭生活を見せる必要もある。それを見て、感動した関東の人々は、しだいに親鸞に心を開き、親鸞の説く念仏の教えに耳を傾けるようになったのではないだろうか。

今井の指摘にもあるように、親鸞の伝道活動は彼自身の「宗教生活や家庭生活を見せる」ことも深く関わり、家庭をもちながら一介の念仏者として生きる実直な生き方が人々の心をとらえたのだろう。また『歎異抄』には、「親鸞は弟子一人もたずさふらふ」(第六条) という有名な言葉がある。

しばしば師弟関係は厳格な上下関係を前提とし、師という権威に対して弟子の絶対服従を要求する。しかし親鸞は、「信心や念仏は直接に阿弥陀仏からいただいたもので、自分が与えたものでない以上、自分には弟子と呼べる者は一人もいない」という立場を明確に表明している。

親鸞は「師・弟」という上下関係にはこだわらず、本願を信じ念仏を称える者はだれでも等しく友、同朋であると考えていたのである。大勢の農民や武士がそのもとに集い、「いし・かわら・つぶて」のごとく社会の底辺に生きる人たちと屈託なく交わる、生活感あふれる親鸞の姿を思い浮かべることができる。

¹⁸ 源信(942～1017)の『往生要集』に、「臨終の一念は百年の行業に勝る」(大文第六・別時念仏)とある。死後の救済を希求した当時の人々にとって今際の際は何よりも大事であり、従って臨終念仏が強調され、人生のすべてが臨終の一点に凝縮される。それゆえ、五色の糸を引く臨終行儀が厳粛に執行われ、山越阿弥陀図などの来迎絵画が人々の関心を集めることになる。

¹⁹ 『増補 親鸞聖人眞蹟集成』第一巻、339 頁。

²⁰ 『別冊太陽 親鸞』平凡社、2009 年、83 頁。

おわりに

親鸞の生きた古代末期から中世初期は、公家から武士へ権力が移行した社会の転換期にあたり、天災や人災、疫病、飢饉が相次いだ時代であった。親鸞自身も、90 年におよぶ生涯の中で、比叡山での挫折、僧籍剥奪、越後への流罪、関東への移住、晩年における善鸞事件など、いくつもの危機に直面している。それらの苦境や困難を乗り越えることで、親鸞自身の人格は鍛えられ、人間的にも深まりを見せた。

親鸞は何よりも「真実」を探求した人物である。親鸞にとっての真実とは、阿弥陀仏の本願力であり、具体的には法然との出会いによってその一生が決定的に方向づけられた。本論において、凡夫の救い、往相・還相、信心と念仏、現生正定聚など聞き慣れない言葉が出てきたが、そこにいわれていることは、人間の尊厳、他者への慈悲、共生の思想と密に関わるものばかりである。

(＊なお、仏教思想(親鸞を含む)には、動植物、土くれや石ころ、山川や大地などの環境世界との共生についても語られているが、今回は時間の関係で省略させていただく。)